

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 10 月 10 日現在

機関番号：82610

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23890176

研究課題名（和文） 乳がん患者が乳がんと共に生きる力を高める看護介入方法の開発

研究課題名（英文） Development of nursing care to encouragement breast cancer patients for living with breast cancer

研究代表者

山手美和（YAMATE MIWA）

独立行政法人国立国際医療研究センター・国立看護大学校・准教授

研究者番号：80347202

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、乳がん患者が家族、医療者や友人などの重要他者との関係性の中で、乳がんと共に生きる力をどのように高めているのかについて明らかにすることである。乳がん患者 9 名を対象にインタビューガイドを用いて半構成面接法にてデータ収集を行い、継続比較法にて分析を行なった。乳がん患者は、乳がんと共に生きていくために、〔家族〕〔医療者〕〔乳がん体験者〕〔職場〕の人々と共に《治療に専念できる環境》を作り出していた。乳がん患者自身は、受け身で治療を受けているのではなく、さまざまな支援を受けながら、《自分なりの乳がん治療の受け方》を編み出していた。乳がん患者が創り出した「乳がんと共に生きる生活」を尊重した包括的支援体制が必要である。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to described how to encourage breast cancer patients living with breast cancer in important others relationship such as family, healthcare staff and friends. The participants were nine breast cancer patients. Data was collected through in-depth interviews, a using semi-structured interview guide, and was analyzed qualitatively. The breast cancer patients created an environment to concentrate on self-treatment while living with breast cancer with family, healthcare staff, breast cancer survivors and co-workers. The breast cancer patients devised ways to receive breast cancer self-treatment without being passiveness while receiving various support. It is necessary to establishment a comprehensive support system which breast cancer patients create, in respect to "living with breast cancer" .

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2011 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：乳がん、がんサバイバー、がんとの共生、看護介入方法の開発、サポート

1. 研究開始当初の背景

我が国において乳がんの罹患率、死亡率は共に増加傾向であり、1998年に胃がんを抜き、女性のがん罹患率では第1位となり、今後さらに増加することが予測されている。乳がんの特徴として、初発治療後10年が経過しても再発・転移する場合がある。壮年期の女性は、社会人としての社会的役割や家庭内における妻、母親役割など、様々な役割を担い生活している。そのような状況の中で、乳がん患者は再発・転移など死や生きる意味などの根本的問題、乳がんの治療のために乳房切除術を受けること、化学療法によるボディイメージの変化、子どもへの病名告知の問題、子どもや家族とのコミュニケーションの低下の問題など、様々な問題を抱えながら長期間にわたって生活していくこととなる。また、がん患者は、がんになったことで、人生における仕事の意味や家族との関係、これからの生活や人生、生きる意味を捉え直し、新たに自分らしい生き方・ライフスタイルを見出していくことを迫られることが多いといわれる。このような状況の中で、乳がん患者が長期にわたり、心理的苦痛や治療による身体的苦痛、社会的な苦痛を抱えながら治療を継続し生きていくために、乳がん患者自身の持っている力を最大限に活かしながら、また、家族や医療者、友人などの重要他者からの支えを受けながら、どのように治療を継続し、乳がんと共に生きる力へとしているのかについて明らかにしていくことは重要であると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、乳がん患者自身の乳がん

という健康問題を対処しようとする自己の能力だけでなく、家族、医療者や友人などの重要他者との関係性の中で、乳がんと共に生きる力をどのように高めているのかについて明らかにすることである。

3. 研究の方法

1) 研究デザイン

質的帰納的記述型研究デザイン

2) 研究対象者

乳がん手術後で外来通院中の患者

3) データ収集場所

首都圏にある医療機関1箇所と東海地方にある医療機関1箇所の合計2箇所

4) データ収集方法 半構成面接ガイドに基づく面接法とし研究者1名が研究対象者1名に対して2~3回行った。面接時間は平均32分だった。半構成面接ガイドの内容は、健康生成論¹⁾を基盤としながら、乳がんと共に生きる体験・思い、乳がん治療を受ける体験とその対処、乳がんの治療過程における重要他者との関係と支援内容とした。

5) データ分析方法 データ分析は、継続比較法²⁾を用いて分析を行った。結果の信頼性と妥当性を確保するために、がん看護学と質的研究の専門家にスーパーバイズを受けた。

4. 研究成果

1) 研究対象者の概要

研究対象者は、外来通院中の乳がん患者9名であった。年齢は30歳代1名、40歳代8名であった。家族構成は、夫とその子どもと共に生活している核家族が8名、乳がん患者と夫とその子ども以外の者も同居している

拡大家族が1名であった。術式は、9名全員が乳房切除術であり、さらにリンパ節郭清術も行っていた。また、9名全員が、手術前または手術後に化学療法を受けていた。また、1名を除き全員が放射線療法を受けていた。

2) 乳がん患者が乳がんと共に生きる体験

乳がん患者は、〔家族〕〔医療者〕〔乳がん体験者〕〔職場〕の人々から《治療に専念できる環境》を作ってもらい、《自分なりの治療の受け方》を見つけ出し、乳がん治療を受けていた。乳がん患者が捉えた〔家族〕〔医療者〕〔乳がん体験者〕〔職場〕の人々から受けている支援は下記の通りである。

(1) 〔家族〕

① 【大きな支障なく日常生活が送れる】

「通院の時に送り迎えをしてくれる」「子どもの世話を家族がしてくれる」「食事の準備や掃除・洗濯などの家事を行ってくれる」など、乳がん患者が治療に行くため、また、治療のために体調が思わしくない時に、夫や実父母・義父母ができる範囲内で自分の代わりに家事を行ってくれたことで、家族の生活が支障なく送れると捉えていた。

② 【ポジティブに物事を考えられるような声かけをもらえる】

乳がんと診断され落ち込んでいる時に、「なってしまったものは仕方がない、頑張って治療しよう」「家族が明るくいてくれた」「抗がん剤の治療で気持ち悪くて寝ていたら、気持ち悪いだけなんですよ。死なないからといわれて、なんか吹っ切れたんですね」というように、家族の言葉や態度が、精神的な辛さを軽くしたり、乳がんの治療を前向きに受けることができるようにさせてくれたと捉えていた。

③ 【生きることを意識させられる】

「自分も大変なのに、子どもの世話もしな

くちゃいけない」という思いの中で、「子どもがいるんだから、生きるのは義務でしょ。子どもを育てるのは母親の義務」といわれ、厳しい一言なんだけど、生きなければという思いにさせられたと語っていた。

(2) 〔医療者〕

① 【信頼できる医師がいる】

「近くの病院で乳がんと診断されて、その後、今の病院に来た。前の医師が、いつでも相談に乗るからといってくれたから、今の主治医からの説明で分からないところがあったりすると、前の病院の医師のところについて聞いています」というように、自分にとって信頼できて、なんでも相談できる医師がいることの大切さを語っていた。

② 【「いまさら聞けない」というもどかしさと関係性の隔たりを感じる】

「医師って、毎日、がんでと宣告しているかも知れませんが、私にとって、「がん」は初めてのことだから、いろいろ相談したいのにできない」「医師には、忙しそうであまり聞けない。本当はゼロから聞きたいんだけど、医師は、乳がんに関する情報を全部知っていることを前提に話してくるので、いまさら聞けない」と、乳がんという病気のこと、治療のことなど、知りたいことを聞けない雰囲気があり、関係性の隔たりを感じていた。

③ 【診療科同士の連携の実感】

「一度、言ったことは、カルテとかに記録していると思ったら、全然伝わっていなくて。何度も同じことを繰り返して言わなきゃならないのか」と、同じ病院内の診療科同士の連携や情報共有のあり方について疑問を抱いていた。

④ 【適度ないい関係を保つ】

「この看護師さんは、忙しそうだけど、声をかけてくれたり、名前を覚えておいてくれている。親しすぎることもなく、ほどよい

加減でかかわってくれる。こちらも、親しくなりすぎると言いにくくなることもあると思うので、いい感じでかかわってくれているなあと感じる」と、看護師との適度な関係性の大切さを語っていた。

⑤【親身になって考えてくれる】

「看護師さんは忙しいのに、困っていることがあったり、些細なこと、どうでもいいけど、聞いておきたいというようなことにでも、親身になって考えてくれる。気持ちを分かってもらえたって思える」と、乳がん患者の気持ちを汲み取った上での対応について語っていた。

⑥【希望の時間に治療を行ってくれる】

「子どもと夫を送り出して、洗濯と掃除をやって、病院に来ると10時くらい。だから、治療開始の時間を10時くらいにしてほしいといったら、叶えてくれて。急な時間変更も可能だし」と、治療開始時間の希望を叶えてくれたことで、日常生活には支障がなく治療を受けることができると捉えていた。

⑦【乗り越え方を教えてくれる】

「他の人はこうだったよ。こういう人が多いね。皆さん、こうやって頑張っていますよ。というように、他の患者さんの体験談を教えてくださいながら、どのようにしたら、乗り越えていけるのかを教えてください、私ならではの乗り越えられそうなことについて一緒に考えてくれた」と、乳がんの治療をどのように乗り越えていけばいいのかについての提案をしてくれたと捉えていた。

(3) [乳がん体験者]

①【病気と闘っている姿を見るだけで励ましになる】

「がんの治療を終えた人の話を聞いて、頑張っている姿を見て、自分も頑張ろうと励まされた気がした」と語っていた。

②【「大丈夫」という言葉をかけてもらえる】

「大丈夫」と、乳がんの体験者から聞けると、私も大丈夫なのかなあって、なんか思えた」と語っていた。

(4) [職場]

①【自分でもできることがあるという自信がもてる】

「今は、午前中だけ半日、仕事に行っています。大した仕事はできないんだけど、でも、私にでもできることはあると自信になっています」と語っていた。

3) 乳がん患者が乳がんと共に生きる力を高める看護介入方法の検討

本研究結果から、乳がん患者は、[家族][医療者][乳がん体験者][職場]の人々から《治療に専念できる環境》を作ってもらい、また、《自分なりの治療の受け方》を見つけ出し、乳がん治療を受けていることが見出された。

[家族]については、乳がん患者と家族が、「乳がんになったことでの生活」をどのように送っているのか、また、家族の対処力、適応力、家族の関係性についてアセスメントし、乳がん患者と家族の体験を理解し介入していくことが重要である。

医療者について語っている内容を見ると、特に、医師の「忙しさ」と「相談しづらさ(話しにくさ)」「診療科同士の連携」について、否定的な意見があった。そして、それらを補うために、前医や看護師に相談していることが窺えた。

がん患者のためのがんに関する情報提供についてはパンフレットやインターネット、がん体験者のブログや体験記などの媒体があり、がんに関する情報は以前より入手しやすくなったものとする。しかし、乳がん患者にとっては、長期間にわたる乳がん治療においては、がん関連の情報を知りたいというだけでなく、日常生活の過ごし方、がんと

もに生きる・生きていく中での不確かさに対応していく方法について知りたいという気持ちもあるものと考ええる。

乳がん患者は、受身で治療を受けているのではなく、看護師と【適度な関係を保つ】ことをしながら、【希望の時間に治療を行ってくれる】【乗り越え方を教えてくれる】【病気と闘っている姿を見るだけで励ましになる】【「大丈夫」という言葉】【自分でもできることがあるという自信】など、重要他者からのさまざまな支援を受けながら、《自分なりの乳がん治療の受け方》を編み出していた。乳がん患者・家族が、「乳がんになったことでの生活」に押しつぶされないように、持っている能力を發揮しながら、乗り越えていくことができるように、がんとともに生きていくことについて考え・実行していくことができるような支援体制が必要であると考ええる。がん患者・家族にとって信頼できる医療者がいることの大切さやチーム医療の重要性について指摘されているが、これらの充実を図っていくことが重要であると考ええる。そのためには、がん患者と家族との信頼関係の構築を図ることが重要であると再認識することの重要性が考えられる。また、医療者の情報共有や連携の充実、相談窓口の充実・拡大、認定看護師やがん看護専門看護師などの資源の活用を促し、病院全体で支援してくれているという実感をもってもらえるような関わりが重要である。また、乳がんと診断した病院と治療を行う病院が異なったり、ある治療方法のみ異なる病院で受けるなどの例も見られることから病院間の連携を図り、シームレスな支援体制や診断期からの包括的な支援体制を整備していくことが重要である。また、近年、がん体験者同士のピアサポート事業も展開されているが、それらも合わせ、それぞれの部署が有機的に連携を図ることができ

るような支援体制を整備・拡充していくことが重要であると考ええる。

引用文献

- 1) Antonovsky,A.(1987). Unraveling the Mystery of Health: How People Manage Stress and Stay Well. Jossey-Bass Publishers, San Francisco. 山崎喜比古, 吉井清子監訳 (2001).健康の謎を解く—ストレス対処と健康保持のメカニズム. 有信堂高文社
- 2) Holloway, I., Stephaine W.(2002). ナースのための質的研究入門. 野口美和子監訳 (2006). 医学書院

参考文献

- 1) Antonovsky,A.(1987). Unraveling the Mystery of Health: How People Manage Stress and Stay Well. Jossey-Bass Publishers, San Francisco. 山崎喜比古, 吉井清子監訳 (2001). 健康の謎を解く—ストレス対処と健康保持のメカニズム. 有信堂高文社
- 2) 山崎喜比古 (2009). ストレス対処力 SOC(sense of coherence)の概念と定義, 看護研究, 42(7),479-490.
- 3)Ezer,H., Richerd, N., Bouchard, L.(2006). Adaptation of wives to prostate cancer following diagnosis and 3 month after treatment: A test of family adaptation theory, International Journal of Nursing Studies, 43(7), 827-838.
- 4)Mizuno,M., Kakuta, M., Inoue, Y.(2009). The effects of sense of coherence, demand of illness, and social support on quality of life after surgery in patients with gastrointestinal tract cancer. Oncology Nursing Forum, 36, E-144-E152.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 0 件)

[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山手美和 (YAMATE MIWA)

国立看護大学校・准教授

研究者番号: 80347202

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: